2022 年9月から 12 月まで開催された「北の縄文展 2022in 釧路・網走」が終了しました。

２か月半にわたる展示会に、１９の自治体からのご協力を得て、約 300 点の出土品を展示したところ、約 4,000 人のお客様にお越しいただきました。なかには両会場のフロアトークにご参加いただいた方もいらっしゃいます。

網走会場で開催の縄文キッズセミナーでは、「土器の中を観たい」と保護者に身体を持ち上げてもらい、中を一生懸命に覗き込お子様や、「自分の町には、こんな縄文時代のものがあるよ」と目をキラキラ輝かせながら教えてくれるお子様もいらっしゃいました。

「北の縄文展２０２２」

2023 年１月下旬から３月下旬まで浦幌町立博物館において、「北の縄文パネル展」を開催する予定です。

北海道のロングロングヒストリーをぜひ感じてみてください。

北の縄文道民会議　荒川代表が行く！　北の縄文文化回廊を巡って【第１回】

縄文世界遺産は、20 年前、４道県知事サミットで堀達也知事（当時）が「北の縄文文化回廊づくり」を提案されたことが出発点です。

世界遺産登録が実現し、まさに「回廊」が形となった今、少なくとも道内の資産だけは周ってみなければと思い立ちました。

昨年９月、先ずは洞爺湖町の入江・高砂貝塚を訪れました。縄文人も眺めたであろう空間に身を置き、縄文世界遺産のシンボルである赤いロゴマークのついた茶色の標柱の前に立ってみた時、「17 資産走破」という目標が浮かびました。幸い９月は３連休が２度もあります。こうして、いわばスタンプラリーのような世界遺産巡りがスタートしました。

「北海道・北東北の縄文遺跡群ｷｯｽﾞｻｲﾄ JOMON ぐるぐる」より

Ⅰ　津軽半島

１　大平山元遺跡（青森県外が浜町）　北海道・北東北の縄文遺跡群は、津軽海峡を挟んだ両地域において漁労・狩猟・採集によって定住生活が営まれ、高い精神文化を伴いながら１万年以上続いたことが顕著な普遍的価値として評価されました。

この１万年という気の遠くなるような長い時間は、集落や祭祀場の形などによる３つのステージ、さらにそれぞれが前半、後半に区分される６段階で説明されています。

大平山元遺跡は、旧石器時代から縄文時代に移行した最初の段階、15000 年前の「居住地の形成」を示す資産です。ただし、竪穴建物跡は見つかっておらず、移動式テントのような暮らしでの定住の始まりだったとされています。

私は、津軽半島の日本海側からこの遺跡を目指しましたが、陸奥湾との分水嶺を越えて間もなく、小さな集落の裏手に現在整備中の遺跡が現れました。50 年程前に中学生が発見した石斧から調査研究が始まり、東アジア最古級とされる無文土器が見つかったことで縄文文化の史跡と認められました。

なぜこの地で縄文黎明期の定住生活が始まったのか、というのが私にとって最大の疑問でした。当時はまだ氷期が終わったばかりで、今よりも海からは遠かったと思いますので、交易に便利だったということはあまり考えられませんが、遺跡の側を流れる川で石器の材料となる良質な頁岩が採れ、遡上する魚が捕れたというのが答えでした。特に、昨年道内 2 番目の国宝となる黒曜石製品の産地である遠軽町白滝や映画「掘る女」の舞台の一つである長野県長和町の遺跡や遺物が語るように、旧石器や縄文の人たちが優れた石器の材料にこだわり、膨大なエネルギーを注いで採集・採掘・加工したことを考えると、この土地の価値はとても高かったのでしょう。さらにこの地域からは、黒曜石の石器なども出土しており、当時から人やモノの移動があったことが分かります。ここは石器製作の研究開発センターだったのかもしれません。　近くにある元小学校校舎の資料館には、石斧発見当時の様子や遺物が展示されており、ボランティアの方が地元愛に満ちた説明をしてくれたことが印象に残っています。この遺跡が示すステージⅠの前半は、約 9000 年前までの６千年間とされており、６つの時代区分ごとの長さは均等ではありません。もし大平山元遺跡が発見されていなければ、１万３千年続いた縄文文化全体をカバーすることはできなかったということになり、この遺跡の意味はとても大きいですし、この６千年を物語るミッシングリンクの発見も期待されるところです。

無文土器の小さなカケラについた炭素（＝焦げ）による年代測定で 15000 年前頃のものだと確認された

2 亀ヶ岡石器時代遺跡、田小屋野貝塚　（青森県つがる市）

遮光器土偶や赤い彩色土器などで有名な亀ヶ岡文化は、わが国の縄文晩期を代表する文化と言われています。二つの遺跡は、津軽半島の日本海側の付け根の方、つがる市の岩木川流域に水田が広がる津軽平野の丘の上にあります。田小屋野貝塚は、ステージⅡの前半、捨て場や貯蔵施設など「集落施設の多様化」の 6000 年から 5000 年前を示す資産です。貝塚があるということは、かつては周辺に海があったということですが、温暖だった縄文前期には目の前に広がる津軽平野の大半が海だったと知り、地球環境の変化がいかに劇的であるかに驚かされました。

現在、津軽半島の北側にシジミで有名な十三湖がありますが、当時は海、その後は汽水湖が深く入り込んでいました。

最終段階「祭祀場と墓地の分離」の 3000 年から 2400 年前を示す亀ヶ岡石器時代遺跡も、汽水域となった古十三湖に面する段丘上に立地していました。二つの遺跡の出土品などを展示している資料館が休館中だったため、遺物などを詳しく見ることはできませんでしたが、遺跡の近くにある木造亀ヶ岡縄文資料室に立ち寄りました。展示はやや古い感じがしましたが、江戸時代の漂泊の文化人・菅江真澄の足跡などが目を引きました。いずれにしても、この地域は、1887 年出土の遮光器土偶一色で、列車が近づくと目が光るという巨大シャコちゃんが立つ木造駅舎と駅中の売店には行って良かったと思います。

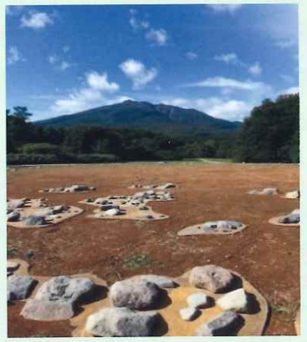
JR 五能線木造駅舎の巨大シャコちゃん

亀ヶ岡遺跡にある遮光器土偶のモニュメント

3 大森勝山遺跡（青森県弘前市）

津軽の秀峰岩木山の山麓に広がるリンゴ園には鮮やかな赤い実がたわわに実っていて、山道を少し迷いながらも、大森勝山遺跡に辿り着きました。

この遺跡は、亀ヶ岡と同じ最終段階の 3000 年前を示す環状列石です。縄文人たちは、岩木山の麓の丘に土を盛って土手を作り、整地した台地の上に組み合わせた石を飛び飛びに配置し、全体として長径が 50m近い楕円形のサークルを形作りました。



岩木山を望むストーンサークル：複数の石のセットがランダムに配置されており、サークルの全体像は上空からでないと分かりづらい。

周辺からは住居跡やお墓が見つかっていない一方、大型建物跡や野外の炉が発見されていて、火を使った祭り、儀式などのために人々が集まった場所ではないか、と考えられています。ハードな日程で時間が合わず、資料の展示施設は見られませんでしたが、祭祀に関係すると思われる円盤状の石が多数出土しているそうです。岩木山は、昔も今も信仰の対象となっていて、津軽平野でひと際目立つこの山は、豊かな恵みが続いて世代がつながっていくことを願う祈りの対象だったのではないか。そこに山麓などの村々に暮らす多くの人々が集い、思いを一つに盛大な祭りを行ったのではないか。前日の雨が上がり、快晴のストーンサークルから仰ぎ見た岩木山の姿からは、そういった情景が浮かび上がってきました。

（次号へ続く）

北の縄文道民会議　スタッフ体験記～

～2022 年度ボランティアガイド養成講座を受講しました～

北の縄文道民会議　広報部長　甲谷　恵

縄文遺跡めぐりに欠かせないのが、現地のガイドさん。ただの原っぱに見える遺跡も（失礼！）ガイドさんの解説を聞くと、とたんにロマンあふれる空間となり、1万年の時を超えて縄文人の姿が見えてくるからとても不思議です。

人材育成やガイド不足が課題としてあげられる中、北海道世界文化遺産活用推進実行委員会（会長：越田賢一郎　事務局：北海道教育庁文化財・博物館課）が 10 月から 10 回シリーズで開催している「縄文遺跡群ボランティアガイド養成講座」に参加してみました。

知識を学ぶ講座が 6 回、現地でガイドさんのお話を伺いながらの実践講座が 4 回。

10 月 1 日の初回は、170 人ものボランティアガイドを擁する「北海道開拓の村」での研修でした。ガイドに必要なのは縄文の知識だけに限りません。「今日はどこから来られたのですか」「〇〇県です」「あ～、△△がおいしいところですね」「おやまぁ、よくご存じで！」これで掴みは OK。47 都道府県について思い浮かぶものを紙に書かされました。また縄文より前や後の時代、アイヌ文化との関係、明治以降の開拓の歴史、食べ物、気候など北海道特有のことなど、お客様が知りたいことはそれぞれ。

縄文の知識や自分が言いたいことだけを話すのではなく、お客様の関心ごとに合わせて 100 の引き出しから 10 程度を出すくらいの心構えが必要であることを学びました。縄文の知識はもちろん重要です。

なぜ、日本の中で、北海道と北東北だけが世界遺産なのか？なぜ、北海道じゅうにたくさんある縄文遺跡の中で 6 つだけが世界遺産なのか？ 1 つひとつの遺跡の特徴は何なのか？縄文人は何を大切にしたのか・・。たくさん湧き出てくる疑問にも、わかりやすく簡潔に、そして興味が生まれるように楽しく解説していかなければなりません。

それぞれの講座では、世界遺産の価値に加え、アイヌ文化の専門家の方のお話、通訳案内士の方からの外国人の視点、出土品から年代を把握する最新技術、発掘・整理・土器や土偶の形につなぎ合わせる気の遠くなるような作業現場など、普段は見たり聞いたりする機会がないようなことをたくさん学ぶことができました。知れば知るほど、たくさんの方々にもこの興奮を伝えたいと思いますし、多くの方が縄文人からメッセージを受け止めるお手伝いをしたくなります。ウイズコロナ時代となり、訪れる方々が増える兆しがある中、ツアー客、個人客、外国人、修学旅行など様々なニーズに対応できる体制が一層必要になってくるでしょう。来年度もこの講座が開催されるようであれば、さらに多くの方々と一緒に学びたいと思いますし、また、すでに各遺跡で、熱く楽しくお客様を迎えてくださっているガイドの皆さんに、改めて敬意を表し感謝したいと感じました。